

とする。閏月の位置も不定であるが、同じ月名でも閏月は必ずず、後に置く。又、月間の日数は、二九日又は三〇日以外に細分できないので、「閏月を設定の直前」では、「月数と寒暖等気候との調制が困難」なので、便宜上、半月毎の「二十四節句」を註記する。

・その他に元號制があるが省略する。

三、元就渡海日の太陰曆換算  
1、外務省が一九五一年（昭和二六年）三月に補正した「近代陰陽曆対照表」があるの

で之を借用する。これに依れば、  
弘治二年二月二日が太陽曆の一五五六年（弘治二年一月一日に該当する）と言う。

2、広島県誌に依ると、弘治元年九月は小の月で二九日間であるが、同二年二月二〇日迄の「一五五五年間の日数」は左の通り、合計一六九日間である。

元年中は九月（一日）、十月（三〇日）、閏十月（二九日）、十一月（三〇日）、十二月（二九日）、小計一一九日、二年中は、一月（三〇日）、二月（二〇日）、小計五〇日。3、「太陽曆の一五五五年の年末より、一応、七月迄」の日数を計算すると、合計一八四日である。（十二月）三一、（十一月）三〇、（一〇月）三一、（九月）三〇、（八月）三一、（七月）三一、合計一八四日。

4、この両者の差は、（マイナス）一五である。即ち、七月の「三一―一五」一六日が渡海日の前日で、渡海日は陽曆七月一七日

である。

四、この渡海日の気象と現代天文学の資料（一九九六年版、日本気象協会編「曆象と潮位」に依つて直せば、気象は左の通りとなる。

1、陰曆は九月末日でも、陽曆は七月一七日であるので、「日の出」は五時一〇分、「日の入」（日没）が二〇時〇四分、即ち、午後八時以後に元就等が乗船、翌朝の朝食後の「日の出」と共に戦闘開始に該当する。

2、陰曆は九月二十九日の月末であるので、「潮は大潮で、朝の満潮時刻は九時〇七分、午後後の干潮時刻は十五時一二分である。即ち、戦闘開始から約四時間は満潮時刻であった。

3、「大野の瀬戸の潮流」は、海底は常に南に流れ、上流は満潮前は北流し、干潮前は南流する（地御前漁業組合談）。即ち、戦闘当初の潮流方向は陶方の船には、向の潮で、不利であった。

「此の瀬戸の潮流の異常さ」に就いては、一三七一年に九州探題、今川良俊が宮島を視察したとき、着目している。（道行き振り）参考―孫子の兵法に曰く、危地に長く滞留すべからず、迅に之を去れ、

例

1、行動に制約のある神島に、無為に十日も滞留（敵島合戦）

2、砂漠地帯の蒙古に無準備にて進攻（蒙古、ノモンハン）

3、敵前、峡谷地帯横断（ビルマ）

4、薄暮、重砲を持って敵前、渡河、戦間友撃（中支）

5、台風季に海上攻撃（蒙古 襲来戦）

6、冬期にモスコウに進攻（ナポレオン）

## 第二章 敵島合戦と地御前村での行蹟

毛利元就に取つて、地御前村の戦略位置は、当初より、陶軍の二方面豫想道路（山陽道路線と海上航路線）に対応するものであり、双方を睨らんで方策を講じている。施設は敵島の「宮の城（囀城）」建設と同時に、四月頃に着手され、陶軍の敵島進駐後、数日目には此処に移動させている。

地御前では、合戦当時の総人口は推定五百餘人、その内、阿品地区を主として、前後を通じて、左の通り、七項目の遺蹟があつた。

### 地御前・阿品概略図

